

## アンカー社、投資船舶が近く10隻に

### 船舶投資ファンドの認知度高まる

#### 今後も投資継続、取引銀行を拡大へ

日本最大の船舶投資ファンドを運営するアンカー・シップ・インベストメント社(辻肇社長)の投資船舶が近く10隻の大台に達する見通しとなった。大手から優良中堅までの邦船社向けにコンテナ船、自動車船、タンカーと多様な船種を保有する。邦船社に新しい船舶調達手段を提供するというコンセプトが浸透してきた結果で、10隻の船価合計は1100億円を超える。投資枠に余力があるため今後も邦船社のニーズに応じていく考えだが、世界の海運会社と同じく銀行の貸出姿勢の後退という問題に直面。地銀など取引金融機関の数を拡大し、これら金融機関が要求する金利水準に合致するようなスキームを構築し、船舶投資を拡大していく。

アンカー社は2007年5月、投資額1000億～1500億円を目指した第1号ファンドを組成して以来、投資船舶の選定を進めてきた。現在までに8隻の投資を決定しており、このうち既に3隻が就航している。加えて2隻の案件で詰めの交渉を進めており、近く投資隻数が10隻の大台に到達する見通し。10隻の船価合計は1100億円を超える。

10隻の用船者は大手から中堅までの優良邦船社ですべて固めており、投資対象は大型コンテナ船、自動車船、VLC、ケミカル船と多様。今後はケープサイズの保有も検討しており、「投資対象のリスク分散が効いてファンドらしくなってきた」(辻社長)。

同ファンドは、国内の機関投資家から集めたエクイティ(自己資金)と銀行からのローンを組み合わせ船舶に投資。対象船は船舶保有会社となるSPC(特定目的会社)が保有した上で、船舶経費の上昇リスクを避けるため裸用船ベースで貸し出す仕組みだ。また長期保有、長期貸船を基本とし、用船期間は約10年を想定。辻社長は「2007年の運用

開始時には海運市況が絶好調だったこともあり、もう少しリスクを取る発想もあったが、ミドルリスク・ミドルリターンに徹した。手堅い運用は間違いではなかった」と評する。

手堅い運用手法が功を奏し、投資家を満足させる運用利回りを確保する一方、邦船社に新しい船舶調達手段を提供するコンセプトが浸透し、それが投資船舶の拡大につながっている。邦船社の船舶調達は主に、①自社建造②船主からの用船③日本型オペレーティング・リース(JOL)などタックスリースの3形態がある。アンカー社はファンドをこれらに続く第4の選択肢として位置付け、「業界共通の“器”」として活用されることを目指した。

邦船社は現在、業績悪化を受けて船腹調達のオフバランス・ニーズを高めており、ファンドの役割は高まる方向にある。辻社長も「こういう厳しい状況の時こそわれわれのファンドの存在意義がある。投資金額にもまだ余裕があるため、今年度も従来のペースで投資を実行していく余力がある」と話す。

ただ、海運市況の悪化、世界的な信用収縮など外部環境は様変わりした。アンカー社のファンドはエクイティにはまだ投資余力があるものの、銀行からのローン確保が最大の課題に浮上している。このためファイナンシャル・アドバイザーであるみずほ証券の協力も得て、取引金融機関の数を増やすため地銀など30～40の金融機関と接触している。「多くの金融機関の感触は悪くない。興味を持ってもらっている。問題はスプレッド。金融機関から提示されるレートは非常に高い。海運会社が望む用船料とは少し乖離がある」という状況。今後はこうした点の問題解決を進め、新たな受け皿としての役割を高めつつ、2010年ごろのスタートを目指して第2号ファンドの設立に向けた準備を開始する計画だ。